観自在

弘長寺寺報
第十七号
平成二十年
八月

大聖東堂様御遷化

（本寺様より重興の称号を賜る）

弘長寺住職　森田裕光

去る四月五日午後十一時五十五分、当山十七世重興 天祐大聖東堂大和尚様が御遷化されました。

世寿八十三歳、その生涯は波乱に満ち、当山の住職となってからはひたすら伽藍整備に尽瘁され、結果として当時とは見違えるほどの立派な伽藍を整えられました。

酒・タバコ・遊び・金儲けなど私利私欲を求めず、「お寺の為・お檀家様の為、誤解され嫌われてもよいから伽藍を整える」との一途な強い意志は、僧侶として極めて希有な存在であり、とても他僧侶が追随でき得るものではありませんでした。

五月二十三日、仏天のご加護による晴天下、総勢七十名を越える御寺院の御随喜と多数の檀信徒・一般の会葬者の御参列をいただき、盛大裡に本葬儀（檀家葬）を執り行うことができました。

お檀家皆さま方には多額のご香典を頂戴し、又特別会計にてご喜捨を賜りますこと厚く厚く御礼申し上げます。

まことに有り難うございました。

（本葬儀特集を後ページに載せました）

天祐大聖大和尚様の葬儀に際り

弘長寺護持会
副会長　坂本研次

平成二十年四月五日、世寿八十三歳をもって遷化されました「弘長寺十七世重興天祐大聖大和尚様の」本葬儀は、五月二十三日午前九時、鎖龕仏事にはじまり、午前十時からの本葬仏事では、本寺の松江市洞光寺住職、諏訪文哉大導師様が秉炬仏事をおつとめになり、曹洞宗管長御代理、大本山永平寺・総持寺両御専使の弔詞、焼香とよどみなく、厳粛かつ荘厳に執り行われ、墓参、大練忌（四十九日忌）法要の仏事全てを天候にも恵まれ、お檀家様はじめ多くの方々にご会葬賜り滞りなく了えさせていただきました。

厚くお礼申しあげます。

弘長寺護持会が執行いたしました本葬儀にあたり弘長寺地区「十和の会」の皆様、梅花講「雪組」の方々、護持会地区委員各位には、前日の諸準備から当日の作業にすすんでご奉仕を賜り、お陰様で大きな役目を果たすことが出来ました。

まことに有り難うございました。

天祐大聖大和尚様は、昭和四十六年、当山に副住職としてお迎えいたしました。

その年には早速駐車場の整備を行われ、以来、庫裡の改築、鐘楼堂建立、東司改築、本堂屋根替え、天井床板張替え、第二庫院改築等ひたすら伽藍整備につとめていただきました。

一方では檀信徒に仏法をわかり易く説かれ、お寺と檀家の融合が一層深くなりました。

その生涯は仏道一筋の精進でした。

そのお徳をたたえられて「十七世重興」の諡号が贈られました。

私たちは、報恩、感謝の心をもって、この尊い法灯を護り続けなければなりません。

やがてお盆です。

ご冥福をお祈りいたしましょう。

合掌

お知らせ　お願い

●阿弥陀堂坐像前に金色燭台一対を寄付していただきました。施主は弘長寺地区・武田民三氏です。後景の金屏風にマッチして一層立派な荘厳となりました。

●本堂に座イスを三十脚増やしました。御詠歌用の低いイスではなく、普通の高さのものを購入しました。（仏具店のカタログは高価なので、インターネットで格安の品を探しました。）お詣りの方に喜ばれています、これからはイスの時代だと思います。

御詠歌講の皆さまに十五脚の御喜捨をいただきましたが、残り十五脚の御喜捨を受け付けております。一脚九千円で、一脚から喜捨を受け付けますので、気楽にお申し込み下さい。

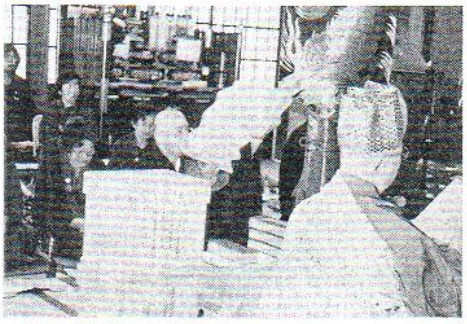
●本年度の盆棚経は、池田団地からスタートです。池田―小松―中垣―内ヶ峠―久戸―大森―横見―大野の順で廻ります。

初盆のお宅へは十四日に伺います。時間は決められませんので、ご理解下さいませ。

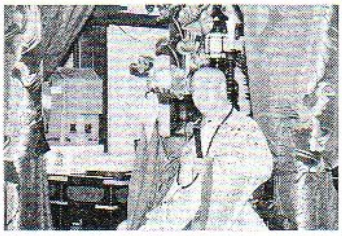
●二十年度八月七日の施食会法話は、（島根県第二宗務所所長）出雲市十楽寺住職・伊藤・元老師にお願いをいたしております、お楽しみに！

●九月に入りましたら、本堂修改築検討委員会を発足いたします。お檀家様の中から随意で住職が選ばせていただきます。

●四月二十日（日）快晴、大般若転読大法要を執り行いました。当山では初めての法要なので皆様目を見開いて修行されておりました。



大般若転読法要のあと、飲み茶をのみながら住職が聞いたことをおはなしをだて聴いた。



き、大般若札と願い餅をお配りし、最後は皆様と一緒に阿弥陀堂横駐車場に於いて、馨子の中で願い札を読経お炊き上げをしました。

●三徳山三仏寺参拝の旅ご案内

～世界遺産先取り研修会～

昨年より第二教区護持会の当番寺院として研修旅行の企画をいたしております。昨年は一泊で京都・奈良の研修をいたしましたが、本年は日帰りコースとなっておりますので、お隣の倉吉方面にターゲットを絞りました。

メインは、世界遺産へ申請準備中の三徳山三仏寺に決定しました。毎年のように転落死者が出るという投入堂へはとても上れませんが、下から遙拝（遠くから拝む）いたします。本寺・松江市洞光寺様の本寺である倉吉定光寺様へもお詣りいたします。教区護持会研修会と合わせて弘長寺護持会研修会といたしますので、どうかご参加下さい。

（参加費約一万円）

※ご希望の方は住職までお申し込み下さい。

記

期日　平成二十年十月十日（金）

・教区内（七時三十分頃出発）←

・曹洞宗金地福山定光寺←

・二十世紀梨記念館←（昼食懇親・見学）

・三徳山三仏寺参拝←

・教区内（十九時二十分頃着）

○本葬儀特集のため、「葬儀の達人になりましょう」は次号に延載します。

誌上法話

住職

果たしてお寺は誰のものか？

～お寺への意識を改革しましょう～

「そもそもお寺は誰のものでしょう？」

という質問をすると、必ず返ってくる答えが

「そりゃあ、檀家のものでしょ」です。

私はすかさず

「違います、絶対お檀家様のものではありません。」と答えます。

「じゃあ、住職のものですか」

とたたみ掛けて来る質問にも

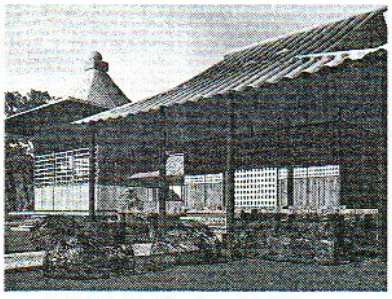
「違います、住職のものでもありません。」

と答えます。

「エエ―っ」と怪訝（けげん）そうなお顔に対してこのようにお話しいたします。

「お寺はお檀家様のものでも、住職のものでもありません…お寺は仏様のものです。仏様のものであるお寺を住職と檀家とで護（まも）らせていただいているのです。

ここをはき違えると『なに、住職一家はワシらが食わせてヤッとるんだ』という情けない発想に陥りやすいのです。」



なるほどそういう解釈もあるのかな、という半分納得したお顔。

「じゃあ、仏様のものと申しましたが、その仏様とは具体的には何でしょう？」

と次の質問に入ります。

「そりゃあ、お釈迦様・阿弥陀様・お寺のご本尊様・お地蔵様・観音様。」

種々の仏様の名前が出て参ります。

「そうです、確かにそういう仏様も含んでいるのですが、私たちにとってもっと大事な仏様があります。

それはこのお寺を代々お護りいただいてきた歴代住職やこのお寺でお亡くなりになった亡僧の方々、そしてお檀家皆様方にとって何よりも大事な仏様は皆様方のお宅でお亡くなりになった先祖代々の仏様方です。」

まだピンとこないようなお顔をなさっています。

「仏とは永遠に修行をする方のことを言います、お釈迦様でさえ今でもご修行されています。

法華経では常在霊鷲山と記述され、説法の道場であった霊鷲山にお釈迦様はいつでもいらっしゃると示されています。

このお寺は、住職にとっても永遠に修行する道場なのです。

住職が亡くなってもどこかよそへ行く訳ではありません。

住職にとってもこのお寺こそが菩提寺、つまり悟り（菩提）を求める道場であり、間違いなく尊いご縁をいただいたこのお寺で、亡くなってからも永遠に修行を続けるのです。

それはお檀家様にとっても同じことです。

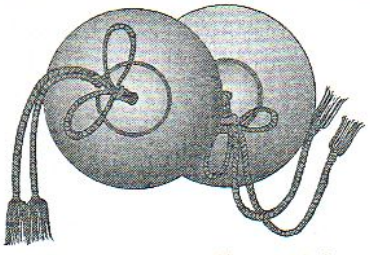
お葬式の時にカミソリを使い髪を剃る儀式をし、仏の戒を授けて、お釈迦様から代々続いている仏弟子となっていただくのがあの葬儀です。

それはお釈迦様の弟子でもあり、この十八世住職の弟子になるということでもあるのです。

住職と共に、永久に菩提寺で修行の道に入る誓いを立てる儀式が、あの葬儀なのです。

皆様方が仏になって成仏するというのは、よその特別な場所に行くのではなく、このご法縁をいただいた菩提寺こそが浄土なのです。

亡くなられた皆様方の親や祖父母・先祖代々の仏様が仏弟子となるために引導を渡された歴代住職と共に菩提寺に住み、共にご修行をされているのです。」



へ―ッ初めて聞いた、というお顔です。

「だから私たちにとって、この菩提寺こそ一番大切なのです。

よくお寺なんか参らなくても家の仏壇やお墓を拝んどればいいよ、というお方がおいでになります。

特にお墓は骨が埋まっているのだから、ここに霊（魂）がおられると信じ込

んでおられる方がいらっしゃる。

あまり大きな声では言えませんが…と言いながら大きな声でお話ししていますけれども、実は曹洞宗でこんなことを言うとお坊さん仲間から眉をひそめられるのです。（小さい声で）幽体離脱現象という言葉をご存じでしょうか。

自分の肉体から身体が離れて、上から自分の横たわった肉体を眺めているという「臨死体験」をされた方は、世の中に多数いらっしゃいます。

つまり、亡くなったら何時までも魂は肉体（骨）にとりついているのではないのです。

私自身も修行道場（京都興聖寺）と弘長寺の庫裡でまか不思議な体験をしています。

もっともそんなことはたいしたことではないのですが、確実に言えることは、死後の世界は「骨があるからそこに霊（魂）がある」、などという唯物論的思考で説明解釈など、でき得るものではないということを肝に銘ずべきです。

ご先祖様や先亡精霊の方々は、菩提寺が死後の本当の住み家で、平素はそこで修行をされているのですから、いつもは仏壇やお墓にはいらっしゃらないのです。だからといって仏壇とお墓は粗末に扱ってよいというものではありません。

何故なら、拝む時には拝む場所（仏壇・お墓）に必ずやって来られるからです。

それはそれで大事なことですが、ご先祖様や先亡精霊の仏様が心底から喜ばれるのは、皆様が菩提寺にお詣りになり、ご本尊様を拝んでから阿弥陀堂（位牌堂）の先祖代々の仏様方へのお詣りをされることなのです。

私は最近親鸞様を勉強してみて、絶対そう確信しているのです。

あ、そうそう…一年の中で三日間は必ず仏壇においでになる時があります…そうです、お盆です。

それから春秋一週間ずつは必ずお墓にいらっしゃいますよ。

ご先祖様や先亡精霊の仏様が、皆様方に呼びかけておられます。

『出来る限り菩提寺にお詣りしてくれよ。

お墓よりも仏壇よりも、種々の仏様がおいでになって仏道修行ができ、生きているご家族と共にご加護がいただけ、有り難いと思えるのは、ここが一番なんだよ』と。

私は何故今、阿弥陀坐像が大変な価値のある仏像であることが発覚したのか。

それは、阿弥陀堂の先祖代々の仏様達からのメッセージだと信じています。

『こんな立派な仏像が存在していることを皆に早く報せたかったよ。

素晴らしいお寺だということに早く気づいて、出来るだけ多くお寺の仏様や阿弥陀堂にいる私たちに手を合わせてくれよ』

さて結論です、何故お墓や仏壇よりも菩提寺が大切なのか…もうお解りですね。

私にとっても皆様方にとっても、近い将来、菩提寺が永遠の住み家となるからなのです。

だから菩提寺を良くしていくことは自分の死後（将来）の住み家を良くしていくのと同じことなのです。

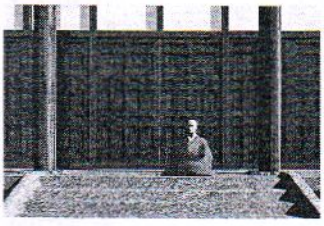
せめてご先祖様に対する特別な日、お盆・正月・春秋彼岸の最低四回くらいは、お墓や仏壇へのお詣りの後で、お寺へしっかりお詣りしたいものでございます。

ゆめゆめ『お寺なんかそげん立派にせんでもええ』などという不見識な思いをお持ちになりませんように。

今日のお話しで、少しはお寺への認識が変わったでしょうか。

では今日のお話しを終わります。」

合掌



本葬儀特集Ⅰ

弔辞（本葬当日）

弘長寺護持会
会長　武田民三

謹んで、当山十七世重興天祐大聖大和尚様のご真前に哀悼の辞を捧げます。

「諸行無常、会者定離」の世といいながら、天祐大聖大和尚様のご遷化に当たり、私どもは多くの言葉を失います。

平成十二年、突如病に伏され、ご不自由なお身体でのご養生の日々でありました。

檀信徒の誰もが、心からご平癒ご全快をお祈りしていましたのに。

その願いも叶わず、従容としてお旅立ちになろうとは…。

傷心のあまりその為す術を知りません。

檀家一同、今なお悲嘆哀傷のうちにあります。

大聖大和尚様ご危篤の報に接し、ご入院先に駆け参じたそのとき、ご臨終の枕元で奥様が涙ながらに繰り返しお語りになっていた言葉が印象的でした。

「大丈夫ですよ、何にも心配無いですからね。」

それは大聖大和尚様の偉大なご功績に対する心からの感謝のお気持ちと、「長い間の闘病お疲れ様でした、どうぞ安らかにお休み下さい」というご慰労のお気持ちが込められた深いご心情を表現されたもの、と受け留めさせていただきました。

大聖大和尚様には、昭和四十四年副住職としてご入山、爾来ひたすらに寺門の隆昌を願われ、山内伽藍の整備に全てを捧げお尽くしになられました。

庫裡、第二庫院の改築、鐘楼堂の建立、更には本堂屋根替え、或いは鐘楼堂脇の檀信徒用東司を改築なさるなど、曾ての山内とは見まがうまでに立派にしていただきました。

このご功績に対して、本日の大導師様であり、ご本寺様でもある松江市洞光寺様から重興の称号を頂戴することができましたことは、檀信徒にとりましても無上の喜びでございます。

そして伽藍整備だけではなく、我々檀信徒の教化、教導にもご尽力をいただき、わけても「喜捨」の心と、「利他行」が最も大切であることを、機会ある度に切々とお説きくださいました。

石見の国でお生まれの大聖大和尚さまのご気性は、まさに「虚心坦懐」にして、常に「有言実行」の人でありました。

それだけに檀家の誰もが、大聖大和尚様のご説示に随順し、精進してまいりました。

大聖大和尚様ご遷化の悲しみから抜け出すには、なお多くの時間を必要とするでしょう。

しかし私たち檀家一同は、この悲しみの底でいつまでも座視していることは許されません。

幸い弘長寺檀信徒は、法灯をお継ぎになりました当山十八世大心裕光方丈さま、そして大聖大和尚様ご導師により得度を挙げられ、現在曹洞宗門の大学にて仏教学を学んでおられる後継の大裕さまを推載致しております。

大聖大和尚様のご遺志を継承しつつ、檀家一同後継の住職様と心を一にして菩提寺の護持興隆を目指し、その使命を果たしてまいることを此々にお誓いいたします。

どうか私どもの行く末をお導き、お守りください。

天祐大聖大和尚様のご冥福を心からお祈りいたします。

平成二十年五月二十三日

合掌

本葬儀特集Ⅱ

謝辞（本葬当日）

弘長寺十八世
遺弟　森田裕光

失礼をいたします。

一言御礼のご挨拶を申し上げます。

弊師、当山十七世重興天祐大聖東堂大和尚本葬儀を執り行いましたところ、本寺・松江市洞光寺諏訪文哉大導師様をはじめ諸仏事導師様方、管長御代理・十楽寺様、永平寺御専使・松源寺様、総持寺御専使・・・総光寺様、宗議会議員・・・弘安寺様、第二教区長・・・妙岩寺様　各御老師様方のご来臨御焼香を賜り、また近隣の配役御寺院様方、ご会葬賜りました諸尊宿老師様方の御加担御焼香を頂戴いたしましたことに対し、衷心より篤く御礼申し上げます。

誠に有り難うございました。

当山の興隆に多大な艱難を尽くした弊師に対し、かくも盛大な本葬儀を営修挙行することができましたことが、いささかなりともその大恩に報いる報恩行となった思いが致します。

そしてこの本葬儀のために、ご理解とご協力をいただいた護持会役員様方はじめお檀家の皆さま方、わざわざ当山まで足をお運びいただいてご焼香賜り、またご真前にご香資ご供物等をいただきましたご会葬の皆さま方、全ての皆々様方に、一緒に並んでおります護持会長とともに、高いところからではございますが、心から篤く篤く感謝御礼申し上げます。

誠に有り難うございました。

個人的な話で恐縮でございますが、私はお寺に生まれながらお坊さんになる気は全くなく、三十五才にしてようやく僧侶になる決意をし、二年間の修行の後、三十七才で大聖大和尚の弟子として当山に入りました。

平気で人前で叱声を受けるなど、私にとっては厳しい師匠でありましたが、今にして思えば実の親子ではおそらくできないであろう尊い頭陀行をさせて頂きました。

その厳しさがあったればこそ、仏教に関して全く無知であった私を、まだ一人前とは言えないまでも、一人前に近づくことができた僧侶に育てていただいた気が致します。

思い返せば、これといった趣味のない弊師でありました。

酒・たばこ・遊び事何もないのであります。

ただ資金を貯めて、貯まったところで伽藍を整えていく、その伽藍整備が唯一の趣味といえば趣味であったような気がします。

しかし、お檀家様と相談しながら事業を展開するというタイプではなく、自分一人で思い通りに猪突猛進するタイプでございましたから、かなり誤解を受けたり、摩擦があったこともございました。

そういう点では不器用だったとおもいますけれども、嫌われてもいいからお寺を良くするんだとの一心で突き進み、そのお陰で当山は驚異的なスピードで現在のような伽藍の整備が可能となったのです。

私利私欲を持たず、全てお寺のため、お檀家様のために尽くしたまぎれもない事実が、実際の結果として現成しているのです。

残念ながら同じ行履を踏む力量など私には到底ございませんから、今更ながら弊師の偉大さを痛感している次第でございます。

最後になりましたが、弊師天祐大聖大和尚が生前に受けましたご法愛・ご厚誼に対し、本人に成り代わりまして御礼申し上げます、誠に有り難うございました。

後に残りました私どもはいたらぬものばかりでございますが、どうか弊師同様にご法愛・ご高配を賜りますようお願い申し上げます。

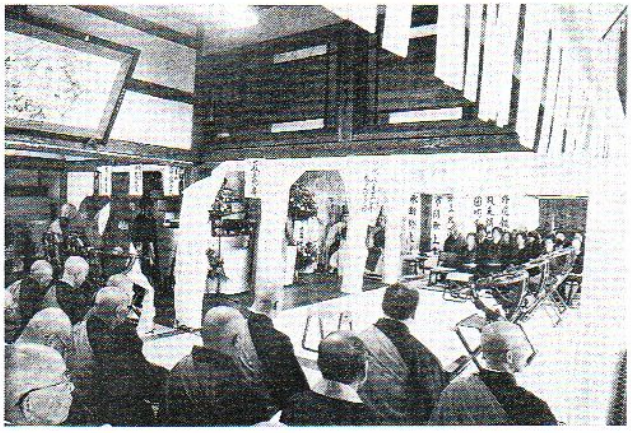
誠に簡略で意を尽くさぬ謝辞ではございますが、御礼の言葉とさせていただきます。

本日は誠に有り難うございました。

本葬儀特集Ⅲ　フォト

鎖龕仏事

準備万端



導師を待ちます

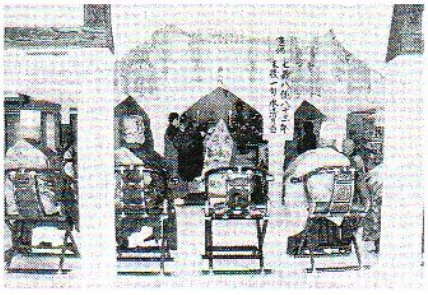
出喪三迎

随喜寺院焼香

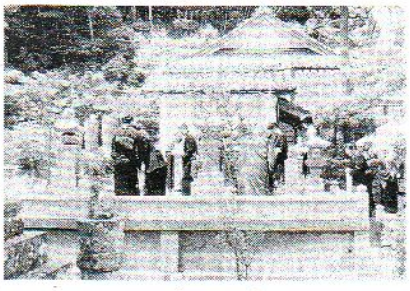
請礼三拝

導師五仏事

御専使弔詞

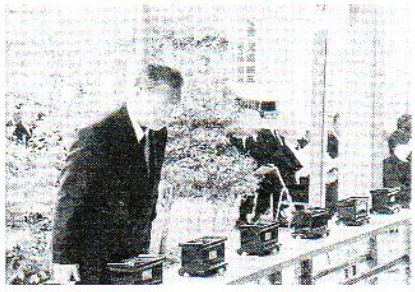


導師法語焼香



墓　参

一般焼香



檀家特別焼香
県議五百川純寿　殿